
特急電車の通過待ち

晴丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

特急電車の通過待ち

【Zコード】

Z8814Z

【作者名】

晴丸

【あらすじ】

3分間のボーイ・ミーツ・ガール 每朝僕らは、3分間だけ会話をする

この作品は、pixivに上げたものと同一のものです。

『おはみづ』

毎朝、三分間だけ僕らは会話をする。

僕が通学に使う時間の電車は、途中駅で特急電車の通過待ちで二分間の停車をする。前から二両田の一一番前のドア。そこで僕と彼女は、その三分間だけ会話をする。

お互に登りと下りで反対方向に向かう電車に乗った僕らは、電車の乗車扉越しに窓に字を書いて会話をするんだ。

きつかけは、彼女が定期を落としたことに僕が気づいて、それを教えたことだった。

二月の頭。暖房でむわっとする車内で、僕はドアの脇に立ち、そこから外を見ていた。

次の駅に着くと、待ち合わせのためにすでに停車している向かいの車両で視界がふさがれる。いつものことだ。この電車も同じようになこれから三分間の待ち合わせをする。

そうしたら目に入ったんだ。対面の下り方向の車両のドアの前に、ちょうど僕に向かい合わせになるように立つ女の子が。

お、と思った。タイプだった。しかもど真ん中ストライク。

大人っぽくおとなしめの印象を与える子だった。年齢は僕と同じか年上ってところ。

クラスで一番かわいい子を決めるアンケートを採つたら三番目ぐらいになりそうな感じの子。図書委員か保健委員をやつてて欲しいタイプ。右田尻の泣きぼくろが色っぽい。髪は、軽く肩に掛かるぐらいで、緩い内巻きカールで、もちろん黒髪+天使のリング。

その子の鞄のポケットから電車の定期が落ちるのが見えた。

多分、乗り降りするときのために、出し入れしやすいところに入

れていたんだね。

僕はそのことを知らせようと、トントン、とドアを軽く叩く。もちろん、叩いているのはこちらの車両のドアなので向こうに音が届くわけじゃない。けど、気配とかなんだとか、とにかく動いていれば気づくんじゃないかと思つて。

だから、気づいたらラッキーぐらいの気持ちで、トントン、と軽くドアを叩いたんだ。

彼女は、それに気づいた。びっくりするぐらい簡単に気づいてこちらを向いた彼女と視線がかち合つてしまつて、思わず僕は慌てた。慌てながらも僕は、不審な顔をしてこちらを見る彼女にむけて、外気との温度差で下の方が曇つているガラスに字を書いた。

『 ついで、おちたよ』

と、向こうから見て正しくなるよう、鏡文字で。

あ、という顔をした彼女は足下の定期を拾つて、立ち上がった彼女は、それをこちらに見せるように軽く振ると、

『 ありがとう』

僕と同じようにガラスにそう書いた。

それが最初。それが出会い。

同じ時間の同じ車両の同じドアの前に立つ僕らは、自然と目が合うようになつて。

その日から僕らは、その場所で、ドア越しの会話をするようになつた。

会話、と言つても窓越しで、ジェスチャーとガラスに書いた單文だから、内容なんてあつてないような、簡単なものだ。

あるとき彼女の年齢を知つて僕は驚いた。

『え、中三？ 高こう生だとおもつてた』

驚いたことに彼女は中学三年生で、高校一年の僕より年下だった。年上か、少なくとも同じ年と思っていたので僕は心底驚いて、そう伝えると彼女は、頬をぷくっと膨らませて怒つた顔をして、

『ぴちぴちのっこです！……ふけてみえます？』

それからちよつと落ち込んだ顔でそう尋ねた。僕は慌てて首を振った。

『大人っぽかつたから』

ぴちぴちのっこつて自分で言つ時点で本当に中学生なのか疑つてしまつが、口には出さない。口に出しても聞こえないだらうけど。

『高校生なんですか？』

彼女にそう聞かれて、うなずき、指を一本立て一年とアピール。

『中学生かと思いました。こどもっぽいから』

お返し、とばかりに彼女はそう書いたけど、まだまだ成長期の僕の体はすでに170半ばで、実年齢より上にしか見られたことはない。だから、

『はじめていわれた。ありがと』

『どういたしまして』

ムスッとした顔で彼女はそう書くと、クスッと笑つた。

僕らのした会話は、まあ全然実のない話ばかりで、

『きょう、さむいね』

『この冬一ばんのさむさつて言つてました』

みたいなどうでもいい世間話や、

『じゅけんべんきょう、もうせだー』

『がんばれー』

みたいな、愚痴。それから、

『このもんだい、わかりますか？』

『もちろん……わ、わかるよ？』

受験生である彼女に先輩として、宿題や参考書を解いてみせることがぐらいだった。

それでもそんなつまらない会話でも、ドアを挟んでガラスに文字を書いてやりとりすると妙に新鮮で面白かったりして。

そうやって僕らは毎朝、他愛のない話を続けていた。

「おい、あの子誰だ！？　まさか、カノジョーー？」

ある日の毎休み。弁当を広げていると、隣のクラスで同じ部活の友人が駆け込んできて喚き立てた。まずあの子が、いつの誰かのかとかをきつちり言うべきだと思つたけど、まあ十中八九電車で会う彼女のことだろう。

「……違う。ちょっとした知り合いというか」

言葉を濁す僕を見て、彼は、はあ？　と不機嫌そうな顔をした。
「えー違うのか？　めちゃくちゃ笑顔で、お互いに見つめ合ってクスクス笑つて話して、バイバイなんて手まで振っちゃつてたけど、違うのか？」

「そこまで見てたのかよ！」

「見てた見てた。ちなみにほぼ毎日見てた」

まさかあのやりとりを友達に見られてるなんて思わなくて、非常にいたたまれない気持ちになる。しかも毎日とか！　なんで今まで黙つてたんだこいつ……でも、

「……カノジョに見えた？」

「見えた」

そつか。と僕はつぶやいた。見えたのが、カノジョに。

「うわあなんだそのにやけ面！　くそ！　リア充は爆発しろ！」

ビシ、と背中を叩いて去つていった友人の背を見つつ、僕はむふふ、とにやけた。

次の日、僕はそのことを彼女に伝えた。

『彼女とまちがえられたよ』

いつもの会話の流れで、そういうばさ、なんて前振りをして「何でもない」「気にしてない」ふりをして、そう書いた。手が震えて、文字がいつも以上に汚くなつた。

その言葉に彼女がどう反応するかで、様子を伺おう、みたいなこ

とを考えていた訳なんだけど……彼女は、え、と驚いた顔をした。
ダメだ、これは！ 瞬間的に、事前に用意していなかった訳を書こうとする。しかし、

『わたしも』

と、自分を指した彼女はニコッと笑つて、

『ともだちが、かれし？ って』

そう書いた彼女の顔はちょっと照れたように赤くなっていた。
多分その言葉を読んだときの僕の顔は相当にやけていたと思う。
少しばかり調子に乗った僕はそこでもう一歩踏み込んだ。

『すきなひと、いる？』

彼女はちょっと悩むように頬に指を当てる、それから、

『気になってる人は』

そう書いて、はにかんだ。

『あなたは？』

君、とは言えなかつた。

正直なところ、僕にはこれまで恋愛経験なんて無くて、彼女に対して抱いているこの気持ちを『好き』と呼んでいいのかすらわからなかつた。

それに、出会つてから一週間程度だ。しかも朝三分、ガラス越しにやりとりするだけ。そのやりとりだけじゃ彼女のことはほとんどわからないのと同じだし、そんな状態で『好きだ』というと、見かけで判断されたんじゃないか、って思われてしまつ気がして。

だから僕は、

『キミと同じ』

精一杯の勇気を振り絞つてそう書いた……どこが頑張ったかわからいくかもしないけど、あえていうなら『キミ』という言葉を入れたところです。

キミ、と書いたときの彼女の反応を見てなんかどうにか出来たらいいなというか、その二文字の時点で早とちりした彼女が、『わたしも！』とか言ってくれたらいいなとか、そんな希望を乗せためち

やくちやへたれな、けれど精一杯の僕のがんばり。

え、と目を丸くして最初おどろいたようにした彼女は、続く文字を見て、だまされた、と、ちょっとふくつと頬を膨らませたように見えたけど……ぐ、と。

両手の拳を握つてファイティングポーズを構えた。頑張ろう、みたいなことだろうか。

そこで三分が経過して、電車が動き出し、僕たちはお互になんとなく照れた空気感のまま、バイバイと手を振つて別れた。彼女の反応を見た結果から言つと、かなり希望的観測が混ざつているけれど、脈アリ、ではないかな……もしかしたらそうかも……そう、だつたらいいな。

結局のところよくわからなかつたけど。

それでも僕の頬は自然とにやけていて、ガラスに映る僕の顔は非常に危ない人だつた。

そんな風に、僕にとつて毎日の楽しみを超えて、生き甲斐とまでなつていた朝のその三分は、しかし、割とあっけなく終わりを告げた。

ある日のこと。

いつもの三分が訪れて、けれどそこに彼女の姿がなかつた。

風邪をひいたり、体調不良で学校自体を休んだのか、珍しく寝坊でもしたのかな。

そう思つた僕の目に、ふと座席に座るひとの後ろ姿が目に入った。後ろ姿でもわかつてしまつあたり、僕が彼女のことangelogだけ見ていたかがわかつてしまつ氣がする。いつもドアの前に立つていて彼女は、その日は座席に座つていた。

珍しいな、やっぱり体調悪いのかな。それともなにかあったのかな。

じつ見ないかな。

そう思つた瞬間、彼女がこちらを振り返つた。そして、釣られる
ように、彼女の隣に座つていた人 学ランを着た男子もこっちを
見た。

「！」

二人の視線が僕を捉える前に、僕は慌てて視線をそらした。気づ
いてないふりをする。

『どうした？』

『ううん、なんでもない』

横目でそつと伺うと、そんなやりとりをしているのがわかつた。
僕はガラスに右肩を押しつけるようにして、彼女から隠れるよう
に視線をそらした。

それでも僕はやっぱり彼女が気になつて、一人の方をチラチラと
伺つた。

彼女は笑つていた。

隣の男の子と肩をくつづけるように座つた彼女の横顔は、それま
で僕が見たことのない表情だつた。なんていうか『女の子』って感
じのする表情だつた。

ああ、あんな顔で笑つたりするんだ。

そつか。そつか。

気になるひとはいつの間にか、好きな人にランクアップしていく、
さらに親密な関係にあるらしかつた。

バカみたいだつた。

彼女の気になる相手って言うのは、僕なんじゃないか、って浮か
れて。普通に考えればそうでないことなんてわかつたはずだ。自分
でも言つたように、僕らは朝三分会話するだけのそれだけの関係。
しかもまだ知り合つてから一ヶ月と経つていない。気になつたり、
好きになつたりなんて、普通に考えてみればあり得ない。

クラスメイトとかそういう身近な人を好きな方が自然なことだ。
そんなことに気づけないぐらい僕は、本当にどうしようもないバ
カだつた。

翌日。

彼女はいつもドアのところに立っていて、僕を見つけると笑顔を見せた。

『昨日はごめんなさい』

僕はそんな彼女に曖昧な笑顔を返す。

『ねぼうして、いつもの、のれなくて』

なんで嘘をつくんだ、とは聞けない。ただ気持ちが、さーっと音を立てて冷えるのがわかつた。

『かせとかねぼうかな、って思つてた。きにしてないよ』

薄っぺらな笑みを浮かべたままそう書くと、彼女はほつとしたような、複雑な顔をして、気持ちを切り替えるように手を握ると、足下に置いた鞄からなにかを取り出した。

『じゃーん！』

そう書かれたボードだった。子供の頃よく遊んだ、磁石でなぞる線が書いて、レバーひとつで全部消せるアレ。

『昨日、見かけて買つたんです。便利でしょ？ ガラスの壘りへつきましたし』

得意そうに笑顔を作る彼女と対照的に、僕の気持ちはドライアイスを入れたかのように冷めていた。なんだ、それ、と思つてしまふ。だから、

『わざわざ？』

そんな言葉しか出でこない。その言葉に、彼女はむーっとした。

『わ・ざ・わ・ざ…』

『はずかしくない？』

な、と彼女の表情が動いたのがわかつた。

『窓に書くよりはいいです！ 鏡文字にしなくていいからたくさんかけますし…』

確かに彼女は、そのボードでは漢字を多用していた。

『そうだね』

『ですね？』

白黙げにうなずく彼女に、けどそれなら、と僕は鞄からノートとペンを取り出した。

『別にこれで良かったんじゃない？ わざわざそんなの買わなくても』

『う。 わざわざ僕との三分のために、そんなもの買わなくたつていい……好きでもないやつとの会話のために、そんなことをわざわざする必要なんて無い。』

ツ！ ドア一枚を隔てた向こうから、息を呑むのが伝わってきた。

彼女は、ぐ、とボードを握りしめて震えていたけど、

『バカ』

ボードいっぱいに書かれたその言葉が、僕らの交わしたやりとりの最後だった。

それから、僕たちは会話をしなくなった。

でも二人とも、意地を張るようにいつもと同じ場所に立っていた。たまに視線が合つと、シン、と彼女は視線をそらした。

日を重ねるにつれて、僕の中で後悔の念が強くなつていった。彼女とやりとりが出来ないのがつらかった。けれど、どうせ彼女には好きな人がいるんだ、という醜い感情が邪魔をして、謝るようなことは出来なかつた。

素直に言つべきだつたのだ。『ごめん、と。ただそれだけでよかつたのに。』

だけど、僕は、言えなかつた。

それは日を重ねるほどに、どんどん言つにくくなつていつて。

ある日、彼女が定期を落とした。

それは、彼女が作つてくれたきつかけだつたんだろう。僕の考えすぎでなければ、彼女も仲直りを望んでくれていたんだけど、そう思う。

あとは、どっちが先に折れて声をかけるか、だけだったんだと思う。

そのきっかけを彼女が作ってくれたんだ。

だけどそのとき、僕はためらってしまった。

本当は偶然落としただけで、彼女がもう話しかけて欲しくないと思っていたら……。

そんなくだらない逡巡をしているうちに、彼女の後ろのドアから乗ってきた高校生が定期を拾つて彼女に渡した。

以前、隣に座つていた彼だ。彼女はちょっと驚いたような困ったような顔をして、それから笑顔で「ありがとう」というと、そのまま一人で話し始めた。

改めて見たその男子は、男の僕でも、素直にかつこいいな、って思つてしまふ好青年つて感じで、彼女と並んでいる姿はとても様になつていた。

三分が終わるまで彼女はこっちを一切見ずに、彼と話し続け、電車が動き始めたときにほんの一瞬だけこっちを見て、ツン、とそっぽを向くと彼の服の裾をちゃんと掴んで引っ張つて座席へと移動した。

それがトドメだった。

翌日から、僕はもう話しかけようつていう気持ちすら失つてしまつていて、それでも未練がましくいつも場所で、同じようにドアの前に立つ彼女の方を見ていた。

彼女はこちらをチラリとも見てくれなくなつた。そして僕がどうにも出来ず、口を重ねるうちに、彼女に「彼」が話しかける頻度が増していった。

『おはよ』

『宿題やつた?』

多分、僕がしていたのと同じような何でもない会話を、一人はしていだんだと思う。

次第に親密になっていくそんな一人の姿を見ていられなくて。

僕は、電車の時間を変えた。

「最近どうした？なんか元気ねえじゃん」

「そう……か？」

ある日、前にカノジョとの関係を冷やかした友達が、僕のところへくるとそう言った。

「カノジョと喧嘩したか？」

違う。喧嘩ではない。それにそもそもカノジョじゃない。あの子は今頃は多分「彼」のカノジョにでもなっている。ジロツと僕は友達を見んだ。

「なんだよ。もとともカノジョじゃないし、今はイケメンのカノジョだつてか？」

「な……！」

やれやれ、と友人は肩をすくめて見せた。

「まあなんつーか、俺も見たんだわ……まあ、ありや勝ち目ねえわなあ」

だつたら最初つからそんなこと聞くんじゃない、と思うが、それを言う気力もない。

「見た目も圧倒的に負けてるし、イケメンと話してるカノジョさんは楽しそうだつたし、お前が凹んであきらめるのもわからなかねーよ」

けどな、と友人は言った。

「いいのかそれで？」

「…………」

「こまま逃げんのか？」

友達が、挑発するように言った。

「俺は、お前とカノジョの関係がどんなかだつたなんて一人も知らねえし、あのイケメンとその子の関係も知らねえけどさ……このままだつたら、本当に、あのイケメンにその子とられちゃうぜ？」

「どんとか、とられるとか、物じやないんだから、やつこいつ方に
は」

「んな言葉遊びばぢうでもいいんだよ。本当に好きな相手なら、ビ
ビッてねえできちと気持ち伝えて奪つてこいよ」

「……うみせえよ」

僕は、こひらの皿を真正面から見て暑苦しことを訴つてくる友
人から目をそらした。

「そつか。邪魔したな」

はあ、とため息をついてあきれたよつこせつ言つと、友達は去つ
ていった。

その後、友達の行つた言葉が、僕の中でずっとぐるぐる渦を巻い
ていた。

これでいいのか？ って？ いいわけないだり……でも、しよう
がないんだ。

バカな僕はそつやつて意地を張つて諦めて、ずっとあの電車に乗
らなかつた。

けど、彼女への想いは口ひとこ増してこき、つこに押さえきれな
くなつて。

終業式の日、僕は、特急待ちをするあの電車に乗つた。

久しぶりに乗つた、この時間の電車。前から一つ目の車両の一番
前のドアの前に立つ。

そして、あの三分が訪れた。

向かいの車両の、その場所に、彼女はいた。いてくれた。

僕を見つけた彼女は、目を丸くして、それから慌てて鞄からボー
ドを取り出した。

『あえてよかつたです。今日がこの電車に乗るの最後だから』

そつか、と僕はうなずいた。そして僕も鞄を開けて、そこからあ
るものを取り出す。

『買つたんですか？』

彼女が意外そうな顔をした。僕が取り出したのは、彼女の持っているのと同じボード。実は、彼女に謝りたかったときに買っていて、今までしまい込んでいた物だった。

『もう暖かくなつて、電車のガラスには書けなくなつたからね』
『わざわざ？ ノートでよかつたのに？』

あのときのお返し、とばかりに責め立てる彼女に苦笑いを浮かべる。

『そういうみも、ずっと持つてたんだ？』

『わざわざ、買ったものですから』

澄まし顔を作る彼女に、思わず僕の頬が緩む。

『受験どうだつた？』

彼女は、笑顔でうなずいて、OKサインを見せた。

『おめでとう』

『ありがとうございます』

それから僕たちは、しばらく何でもない会話をした。だんだん暖かくなつてきたね、とか、花粉がつらくなります、とか。

本当は聞きたいことも、言いたいこともいっぱいあつたんだけど、いざ彼女を目の前にすると、何を聞けばいいのか、言えばいいのかわからなくなつて、むしろ、彼女ともう一度会えたことで満足してしまつている自分がいて。

まもなく電車が発車するアナウンスが流れた。

『それじゃあ』

『うん、また』

そう書いた僕に、困つたように笑う彼女を見て、その瞬間我に返つた僕は焦った。

違う、違う！ なにをやつているんだ！ また、はないんだ。今日が最後なんだ。

ドアが閉まりが電車が動き出す。バイバイ、と彼女が手を振った。

そのままじやダメだ。まだ僕は何も伝えていない。このままさよ

ならなんて、絶対に嫌だ。だけど、時間がない。ああ、くそ何を伝えれば

『好きだ』

出てきたのは、その一言だった。

僕はボードにでかでかと書き殴つたその言葉を、動き出した電車ドアに押しつけ、彼女を見せた。

彼女はその文字を見て、驚いたようなあきれたような、よくわからぬ顔をして 電車が遠ざかり、それ以上のことはわからなかつた。

どこの高校に行くのか、彼とはどうなったのか、とか聞きたいことはたくさんあつたけど、なんにも聞けなかつた。自分の気持ちを一方的に伝えただけで、答えさえもらえない。
それが僕と彼女の別れだつた。

四月。

学校が始まって、僕はいつものようにじょじょと早めの電車に乗る。そして訪れた三分間の停車時間、そこに彼女の姿はない。

わかつていたことだけ、少しばかり落ち込む。やっぱり高校とか連絡先をきいておけばよかつた……そんなことを考えて、ドアに右肩をあずけ、視線を窓から外す。

そのとき。

ひらり、と僕の足下に向かが落ちた。拾い上げてみると、それは通学定期。

そういえば、彼女と話すきっかけも、定期を落としたことを教えてのことだっけ。

そんなことを考えながら、落とし主に教えようと顔を上げて、「定期、落としました……よ?」

思わず声が漏れた。そこに立っていた人は、後ろ姿だったけど、僕には誰だかわかつて。けど、もう会うことはないと思っていた人

で。

「ありがとうございます」

振り返った彼女は、落ち着いた顔で定期を受け取る。けど、僕はそれどころじゃない。

「な、なんで、君がここに……？」

戸惑う僕の声に彼女は、定期を示す。定期書かれた行き先は、僕の行き先と同じで、彼女の着ている制服は、僕の学校の女子と同じで。

「おはようございます」

まさか。そりや、彼女の進学先を僕は聞いていなかつたけど、そんなまさか

「今日から、この電車に乗るので、よろしくお願ひしますね、先輩」
いたずらっぽい笑みを浮かべて、彼女はそう言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8814z/>

特急電車の通過待ち

2011年12月27日19時50分発行